

— 資 料 —

## 神戸女子短期大学アトリウム計画案

本 保 弘 子

A Proposed Plan for Atrium of Kobe Women's Junior College

Hiroko HOMBO

### 要 旨

神戸女子短期大学の既存のA館とB館の間にアトリウムを増築する計画案を示した。これは、女子学生にとって居心地のよい自由な利用ができる居場所空間の創出を提案するものである。

キーワード：キャンパス計画 Planning for Campus, アトリウム Atrium, 憩いの場 Place of Relaxation, 居場所 Cozy Space

### 1. はじめに

キャンパス空間は、教育研究の場であるとともに在學生と受験生にとって魅力あるものでなければならない。すでに先進的大学のキャンパス整備計画では、多くの大学が計画理念に交流スペースの充実をあげ、キャンパスは生活の場であるという視点がみられる。具体的には、リフレッシュコーナー、学生スペースといった学生生活をより充実させるための交流空間・生活空間の創出が推進されている。<sup>1)</sup> 特に女子学生は、男子学生以上にキャンパス内でくつろげる場所を求めている。また女子学生は、くつろげる場所では会話や飲食などが制限されない自由な利用を望んでいる。<sup>2)</sup>

今後の女子大学・女子短期大学のキャンパス整備計画においては、教育研究スペースの充実とともに、そこで学ぶ女子学生にとって居心地のよい自由な利用ができる居場所空間の創出が不可欠であると言える。これは神戸女子短期大学においても、ぜひとも必要なものである。

神戸女子短期大学の既存のA館とB館の間にアトリウムを増築することで、女子学生のニーズに対応できる学生憩いの場を創出する計画案を図1～図5に示す。

### 2. 神戸女子短期大学アトリウム計画案趣意

神戸女子短期大学において、女子学生のニーズに対応した自由な利用ができる居心地の良い居場所空間を創出したい。そこは、学生みんなが登校すれば必ず顔を出す場所であり、そこに

いれば誰かに会える場所である。みんなが集まり、学生時代の思い出の源泉となる場所である。

アトリウムは、キャンパス内の動線の中心に位置する。どこに行くにもそこを經由していく所であり、經由していきたくなる所である。正門、通用門の入り口からわかりやすく、自然と足が向かい、将来的にも動線の中心となる。

アトリウム内は緑化を進める。メンテナンスフリーに反し手間はかかるが、潤いのある豊かな空間としたい。

伝統ある神戸女子短期大学らしく、品位を保ち、且つかわいらしさを、洗練された華やかさを備えたデザインとする。神戸らしさも加えて、キャンパスデザインによる学園のブランド化のスタートを目指している。

### 3. 建築計画

新しいアトリウム棟は既存A館とB館の間に配置し、軸線はB館に合わせている。間口は柱間5.4mとし、3スパンである。奥行きは柱間6mとし、6スパンとしている。既存の建物に増築する場合には、既存の建物のどこに接続するかが計画を大きく左右する。既存の学生食堂とアトリウム、既存の渡り廊下とアトリウムをつなぐこととし、既存の建物の負担をできるだけ軽くする方法を選択した。1階では、既存の食堂と4スパンにわたり開口部をそろえてアトリウムとつないでいる。接続部は1階だけで、上部では別々の外壁としており、既存B館の上階での居室の採光、換気、排煙などを元のまま有効になるようにしている。食堂とつないだアトリウムは、明るいテラスのイメージである。南側と西側を大きなガラスの開口部としており、サンコントロール用のルーバーを設け、視界がグラウンドと連続する計画である。グラウンドからの風と砂対策も兼ねることとする。

接続部はヴォールト屋根が連続する形態を採用しているが、これは、神戸らしさの表現として旧居留地の建物に通じるモチーフ、海側の波のイメージにもつながるように考えた。アトリウムの立面のモチーフとして、展開している。

アトリウム部分は軒先で3.5m、勾配2.5寸の片流れの屋根をかけ、頂部で14.5mの高さで計画している。頂部は既存の渡り廊下の上になり、その2階床部分から上約8.6mの高さである。1階アトリウム内部での天井高は3.5mから10.5mである。広さでは1階アトリウム部は16.2m×24.0mで接続部も加えると約467㎡としている。2階の渡り廊下部は屋根だけ架ける計画で、屋外とし、約206㎡の広さである。

アトリウムから既存の2階渡り廊下の上部へと続く片流れの屋根は、ガラス部分とステンレス部分とをバランスよく配置する。そうすることで、夏の日射のカットと冬の日射の取り入れを計画する。また、自然の通風を取り入れ、夏の暖気を逃がし、冬の暖気を足元に循環させることも考慮する。

アトリウムの内部は身近なところである床や柱の下部、ヴォールトを支えるフレームなどは

木質系の仕上げ材とし、親しみと温もりの感じられる場所にしたい。床は木製のフローリングデッキとし、既存の食堂から、フラットに続ける計画である。

アトリウムの植栽については、学生たちの憩う場所にふさわしい、身近で、小柄でやわらかいイメージの植物がよい。中低木とし、はぎ、びょうやなぎ、ゆきやなぎなどを植える。グラウンドカバーとしては芝類とする。メンテナンスがより必要になるが、花の咲く草木類も取り入れたい。学生たちが椅子やベンチに座って寛ぐ場の近くに位置し、触れて見たくくなるような樹種を選定する。位置は柱の周りや既存棟との接合部などとする。

北側では既存の2階渡り廊下と一体的に繋がり、そこからA館にもB館にも接続する。B館の東にある通用門からも近い。センターホールの北側には、中庭を通る回廊を計画している。これは正門から、この回廊を通してセンターホール、アトリウムへとつなげるものである。中庭の回廊部分にはアルコーブのような休憩コーナーを複数設けて屋外の落ち着いた、たまり場所としても計画している。

#### 4. 構造計画

アトリウムの構造は鉄骨造としている。柱は既存の建物の柱位置に近接するのを避け、スパンの中央部に設ける計画としている。柱の上部では、樹木の幹が分かれるように4本に分け、天井の梁を支える計画である。天井の梁位置は既存B館の梁位置に沿う形となり、既存のフレームとつながりながら支え方に工夫を凝らし、軽快で新しい表情を出そうとした。

#### 5. 設備計画

自然の通風や採光をできる限り利用する。

片流れの断面形状をしており、そのため、暖気が上部に集まりやすく、北側の上部壁面に大きな開口部を設けるなどにより、換気のための自然な空気の流れが起りやすい計画としている。夏季や中間期はあけて、冬季には閉める計画である。また、冬季には上部の温まった空気をダクトにより、地上部分に循環させ、吹き出す計画も検討する。夏季の冷房は床下にダクトを設け、人が集まる場所に限定的に床吹き出しの計画とする。既存棟の地下躯体について、調査の上、設備諸室として利用できるかどうかを検討する。

昼間の採光計画は、ほぼ自然光によるものとするが、冬季の夕方や、夜間の利用には照明器具が当然必要である。短期大学であるため、季節では夏季の使用は限定的であるし、一日では昼間の利用が主となる。日常のメンテナンスを考えると、高い天井部分には何も設置しない方向で計画する。照明器具や空調の吹出し口などは、床から自立するポール状の装置に組み込む計画とする。

## 6. まとめ

神戸女子短期大学の既存のA館とB館の間にアトリウムを増築する計画案を示した。これは、女子学生にとって居心地のよい自由な利用ができる居場所空間の創出を提案するものである。

このアトリウムは、学生生活をより充実させるためのキャンパス内における生活空間・交流空間であり、在学生の憩いの場、学生時代の思い出の源泉となる場所である。キャンパス内の動線の中心に位置し、経由していきたくなる場所である。アトリウム内は緑化を進める。伝統ある神戸女子短期大学らしく、品位を保ち、且つ洗練された華やかさを備えたデザインとする。

パースの作成にあたっては、株式会社 坂倉建築研究所大阪事務所の協力を得た。記して感謝の意を表する。

## 参考文献

- 1) 境野奈津子・柳澤要, 先進的大学のキャンパス・施設に関する研究, 日本建築学会2006年度大会学術講演梗概集建築計画 I pp. 371-372
- 2) 田中裕伸・孫イブン・恒川和久・谷口元・木下誠一・今井正次, 大学キャンパスにおける学生の利用場所と意識に関する研究, 日本建築学会2006年度大会学術講演梗概集建築計画 I pp. 363-364

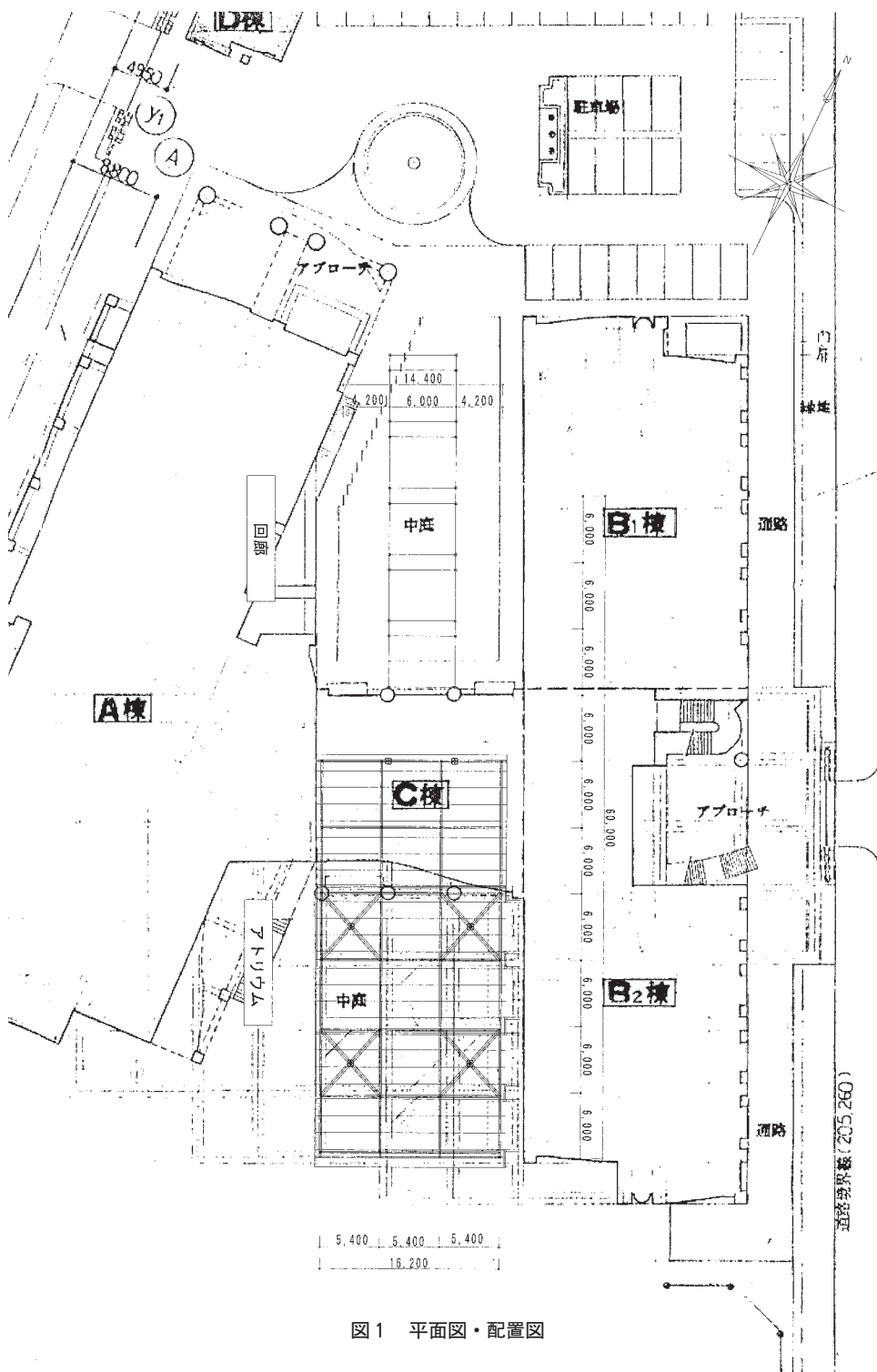


図1 平面図・配置図

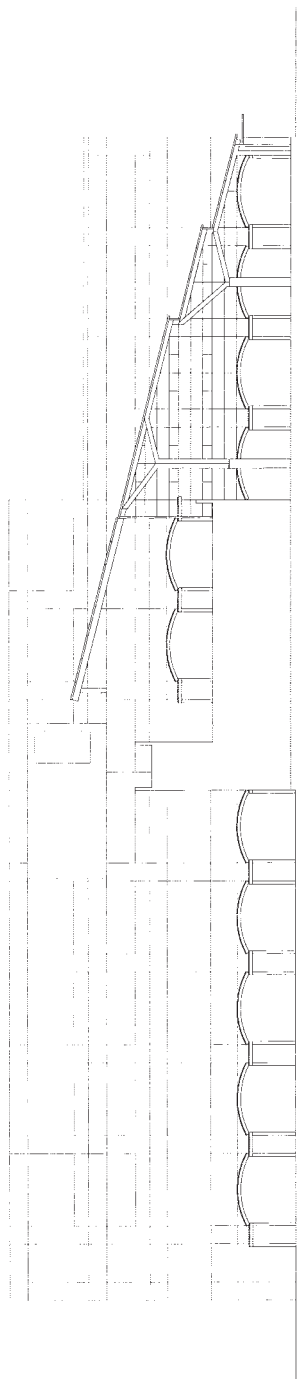
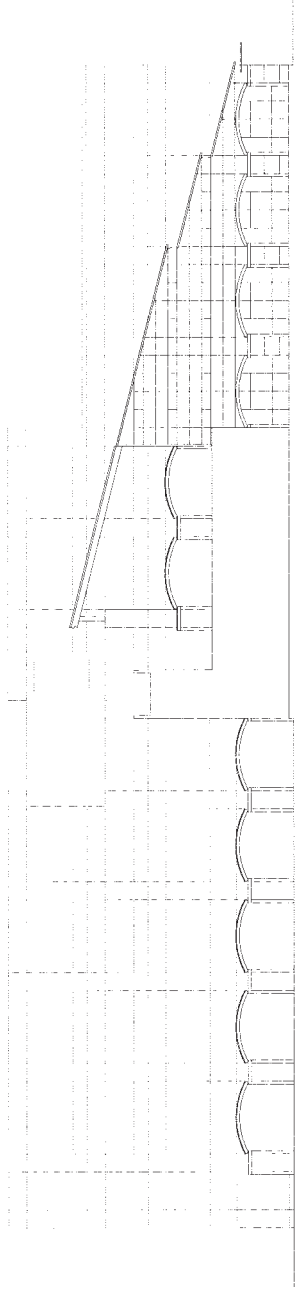
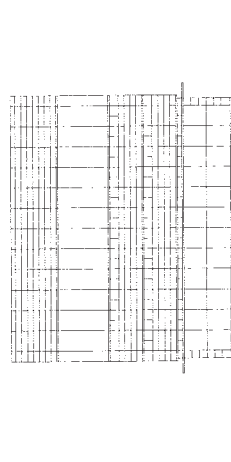


图2 断面图 1 : 5 0 0



西立面图



南立面图

图3 立面图 1:500



図4 外観パース





図5 インテリアパース